

第3回感想文コンクール【優秀賞】6作品

「エルトゥール号救出の物語」を読んで

小学校6年生

「日本人ってすごい。」エルトゥール号救出の物語を読み終えた時の最初の感想です。この事件の4年前には、ノルマントン号が遭難していました。日本人乗客25名は見捨てられ、全員が水死してしまいました。それなのにイギリスの船長は不平等条約のせいで軽い罰を受けただけでした。当時の日本人はとても悔しい思いをしたと思います。こんな事件のあった後なのに、どうして命がけで外国人を助けられるのでしょうか。

自分が死ぬことを覚悟して救助に当たった人々の人間としてのすばらしさに私はとても感動し、この話を感想文に選びました。

明治23年9月16日、初めて日本を訪問したトルコ使節団を乗せた軍艦エルトゥール号が帰国しようとしていました。しかし、和歌山県の沖合で台風の直撃を受け遭難してしまったのです。村長さんの記録を読むと、とても悲惨な様子だったことが想像できます。大島の人々も台風の直撃を受け、外に出るのもやつのことだったはずですが、そんな状況だったのに大島の人々はトルコの人達を救出しようとしたのです。その時、自分達もとても危ないのに、そのことを忘れるくらい助けようという思いが強かったことに私はおどろきました。今の人達は自分の安全が一番、他人は2番目と考える人が多いと思うからです。

この時代には今のように便利な電話等は無かったので協力を求められず、自分達だけで救助をした島の人々はとても大変だったと思います。台風で暴風の中けが人をおんぶして60メートルのがけをよじ登り、安全なお寺へ運んだりしました。いつ落ちて死ぬか分からないのに、トルコの人を助けようとした大島の人達はとても勇気があってすばらしいです。私ならどうしたらいいか分からず、その場を見ているだけかもしれません。それに、けが人をおんぶしてがけをよじ登る勇気もあるか分かりません。いいえ、きっとないと思います。

また、最近はいじめがたくさん起こっています。でも、自分もいじめられるのが嫌だから見て見ぬふりをしている人が多いと思います。自分さえ良ければという考えがいじめをエスカレートさせていくんじゃないかと考えます。この本にあるように日本人は大島の人々のように、困っている人を見たら助けるのが当たり前という気持ちがあるのだから、その気持ちを大切にしたいです。自分さえ良ければという人が多い中で、他人を思いやる気持ちをお互いが持てれば、いじめも少なくなるのではないのでしょうか、この話は私に思いやりの大切さを教えてくれました。この本を読んで本当に良かったと思います。私はいじめられている人を見た事はありませんが、もし見たらこのすばらしい日本人の話を思い出し、勇気を出して助けてあげたいと思います。

「野中到の偉業を支えたもの」

小学校 6 年生

気象予報をするために必要なこと。

それは、できるだけ高い場所で、長期間にわたって、データを集めること。

しかし、冬季の3000メートル級の高山での観測は、大きな危険が伴うため、明治時代には、誰にも実現されることはなかった。

そんな中、データ収集の情熱に燃え、私財をなげうち、富士山での気象観測に臨んだのが、野中到であり、周囲の反対を押し切って夫に同伴したのが、妻、千代子だった。

私は二人の業績を読んで、観測の仕事では、たいした力にはなれないけれど、せめて到の身の回りの世話をし、仕事に打ち込んでほしいと、危険を押しつけて山に入った千代子のいじらしさ。そして、二才の可愛いさかりの我が子を母親に預けてまでも、命がけで夫の元へ向かった激しさにジーンとした。

「女、子どもは引っ込んでいろ。」

幼い頃から、そんな風に言われ続け、男女共同参画の発想など全くなかった時代。女性は自分の夢を持ち、実現のために努力することなど、まずできなかったはずだ。

夫の夢こそ私の夢、その夢の実現こそが私の生きがい。そう考え、妻は夫に、自分の想いをひそかにたくすしかない世情だったろうに到の富士山頂行きの話が具体化した時、千代子は、『到の夢をかなえるために協力したい。留守宅を守る以上の事を、私の力でしたい。そのために、富士山に同行しよう。』そう決意をしたのだ。夫に夢を任せっきりにするのではなく、自分の力で実現の糸口をつかもう…この発想自体、当時の考え方からすると、ずい分大胆なことだったと思う。

至を追った千代子の情熱は、大量のデータを集めて、気象予報を実現したい、と願う到に、決して負けてはいなかっただろうし、千代子が、自分の意思で到と共に観測生活を送る決心をした時から、二人は、妻が夫に従う当時の夫婦の形から抜け出し、1対1の人間同士の関係、同じ夢を持つ、対等でかけがえのない相棒同士になったのじゃないかと思う。

私は、千代子が富士山に行く道を選んだことに感銘を受けた。なんと自分の心に忠実で勇気のある人だろうか、心を揺さぶられた。

私はまだ子どもで、人生の岐路に立ち、道を選んだことなど、もちろんない。

でも、この話を読んで、日々の小さな選択を繰り返し、一步一步、ゆっくり自分の歩くべき道を、責任を持って選び、いつかは千代子のように、堂々とした決断の時を迎えることができるようになりたいと思った。

実際の冬山での観測生活は厳しく、機材は故障するわ、自分達も高山病になるわで、完全なデータを収集することはできなかったが、二人の業績は認められ、後進に道を開いた。

厳しい冬山で到を支えたのは、精神的に前向きで、到の夢にぴったり寄りそった、妻千代子の存在のおかげだった、と私は思う。

「高松凌雲の生涯」を読んで

小学校6年生

私は今まで「赤十字」といえば戦場で敵、味方関係なくきずついた人の世話をしたイギリスのかん護ふさん「ナイチン・ゲール」のことしか知りませんでした。私達の地元福岡にも遠い昔すべての人を分けへだてなく治りょうをし続けた、立派なお医者さんがいた事を今回初めて知り、とても感動しました。

その生涯を読んでいくと彼の波らんにとんだ人生だけでなく、彼の生きていたその時代の日本そのものが、とても大きく変動していたことがわかります。そんなゆれ動く時代の中で、彼はひたすら医学を勉強し、技術を学んでいきました。

海外でもたくさんのお話を学び、進んだ技術を身につけて帰国したのに、そんな彼の最初の活やくの場が戦場から運ばれてくる、けがをおった兵士ばかりの病院だったので、彼も内心、心痛む思いがあったのではないのでしょうか。まわりは先進の技術にとまどいながらも、1人でも多くの負ししょう者を助けるため治りょうに専念していく彼のすがたに心うたれ、次第にだれもが協力的になっていきました。しかし、さすがに敵の兵士が運ばれてきた時、病院内のいかりをおさめるのはとても大変な事だったと思います。こうふんするみんなの心を落ちつかせ、収容した者は、たとえ敵でもきずついた人々であり、公平に治りょうに当たるのが当然であると、病院の人々の心にしみわたる様に説得できたのは、やはり彼の人徳だったからできたことだったのではないかと思います。

「人の命をあずかる医師たる者はかん者に対して公平に平等をつくすべきだ。」と説いた彼の「奉仕の心」と「人類愛」が本当に大切である事を、まわりの人々はいつも彼の行動や言葉から感じとっていたはずです。だから、彼に治りょうしてもらい、命拾いをした多くの人々だけでなく、日ごろから彼のまわりにおいて、「奉仕の心」を学ぶことができた人々も幸せだったのではないのでしょうか。

私達の学校でも「奉仕の時間」というのがあって、学校のまわりの草とりをしたり、老人ホームのお年寄りにカレンダーや雑きんを手作りしたりします。でも「その時本当に心をこめてできていたか？」と聞かれたら私には自信がありません。この話を読んで「奉仕」というのは、人から言われてする事ではなく、自分の心の中からわき上がる自然な気持ちが行動になって表れるものだという事がよくわかりました。私には、凌雲先生のように立派な事はできないけれど、せめて周りのみんなを分けへだてなく愛情を持って接する事から始めたいと思いました。

「学ぶ」ということ

小学校 6 年生

「学ぶ」とは、一体どのようなことなのでしょう。

私は、学校の国語の授業で「赤十字活動の先駆者—高松凌雲」という伝記を読んでそう思いました。高松凌雲さんは、もっと知りたいという意欲を持って勉強し、後に戦争できずついた人々を敵味方わけへだてなく治りようし、最初に赤十字活動を実行した人です。

高松凌雲さんは、天保 7 年に筑後の国古飯村（現在の小郡市）に庄屋の三男として生まれました。

20 歳を過ぎてから、石川桜所先生という医学の先生のもとへ入学し、医学の初歩を身に付けました。しかし、それだけでは満足せず、高松凌雲さんは、もっと奥深くまで医学を勉強したいと思ったそうです。私は、このような勉強に対する意欲がとても印象深く感じられました。

私は、読み終わって、ふと、「私の『学ぶ』と高橋凌雲さんの『学ぶ』は、ちがうような気がするなあ。」と考えました。

例えば、高松凌雲さんは、日本で將軍の医師までなったにも関わらず、パリの医学校でも学ぼうという意欲を持っていたけれど、私はそこまでして学ぼうとは思えなかったと思うところなどです。

学ぶというより「勉強する」というような表面的な私の勉強に対して、高松凌雲さんの「学ぶ」は、勉強したことの奥にある大切なところまでしっかり理解することを指しているように思いました。

私は高松凌雲さんの、「学ぼう。」という意欲こそが、後の偉業につながっているのではないかと思います。学ぶことは、このように、周りの人にいいいきょうを与えることにもなるのです。

私は、この伝記を読んで、急に「学ぼう」とするのは難しいかもしれないけど、日ごろから「深いところまで知ろう」と思っていることで、大きくちがってくると思いました。

私は、まだ、「広く浅く」の「勉強」かもしれません。でも「深く知りたい」と思えるような学び方ができるように、高松凌雲さんの生き方を、そしてその意欲を、日ごろから心にとめておこうと思いました。

私は、この伝記を読んで、「学ぶ」ということは、ものごとを深くまで吸収することということ、そして自らを高め、周囲の人にもいいいきょうを与えられるということだということを学びました。

「野中夫妻の偉業を読んで」

小学校6年生

私は毎日天気予報を見ています。朝出かけるときには傘が必要ないかどうか決めたり、週末に出かける予定がある時は何日も前から週間予報を見て、週末の天気がどうなるか心配したりもします。天気予報では今日の天気だけでなく降水確率や気圧配置、台風の位置や速度・大きさ・進路まで、私たちの生活に密接にかかわることがとてもよくわかります。では天気予報はどのようにしてつくられているのでしょうか？それは主に気象観測をすることでつくられていると思います。しかし気象観測がどの様にして行われているのか考えたことはありませんでした。今回この伝記を読んで初めて気象観測がどの様にして行われ、大変な努力の末に今の天気予報ができたことを知りました。

当時から必要とされながらも不可能とされていた冬の高山での気象観測に挑んだ到はとても勇気のある人だと思います。私は登山の経験はほとんどないし、冬山の様子はニュースや新聞などで見るくらいの事しかわかりません。しかしその厳しさは見ただけでも良くわかります。そんな冬山の富士山に登り気象観測を行う夢を実現させた到はすごい人だと思いました。またその夢を支えるために危険を承知の上、1人で冬山に立ち向かった千代子は更に勇気のある人だと思いました。人間は自分の夢を実現させるためには、どんな努力も出来るし勇気も持てます。しかし他の人の夢を守るために自分の身を危険にさらしてまでも努力する、そこまで千代子を動かしたものは何だったのでしょうか？それは全てを包み込む愛情が千代子の心の中にあり、夫は妻を妻は夫を信頼し尊敬する夫婦の強いきずなが千代子を冬山に向かわせたのだと思いました。そんな夫妻だからこそ実現できた夢であったと思います。

野中夫妻の夢は私たちの安全を守ってくれています。私たちは日常生活のさまざまな場所、方法で簡単に天気予報を知ることができます。この伝記を読むまでは当たり前のことだと思っていました。しかしそれは野中夫妻が危険を冒してまで気象観測をしてくれたから、私たちは1週間先の天気がわかり、台風が来ることを事前に知ることによって、災害を最小限で防ぐことが出来るのです。

この伝記を読んで、日常生活の中で当たり前だと思っていることが、このような人達の努力の上に成り立っていることをしりました。また人を包み込む愛情の深さを感じました。そして何より夢は叶えるものと信じて突き進む勇気を学びました。私の夢は色々であり、まだまだばくぜんとしたのですが、いつも夢は叶うと信じて勇気を持ち続けられたらと思います。

「人のために」

小學校生

もし、私が農民だったらそこまでして、何か人のために役立つことをしようとは思わなかったと思います。

筑後川は、福岡県・大分県・熊本県・佐賀県にまたがっているととても大きな河です。筑後川の周りはお米がたくさんとれます。

でも、江戸時代の初めまでは、ほとんどお米がとれない地域が多かったそうです。原因は、筑後川が深いことと、流れが速いということがあったからです。だから、川の近くの人々は苦しい生活をしていたそうです。

このままじゃ、村は生きていけないと考えたのが、五ヶ村の庄屋の人たちでした。この庄屋の人たちは川の流れをおそくしないとお米が作れないと考えました。そのためには、今のダムのようなものを作らなければいけませんでした。

作っていくなかで、別の村との争いがおきたり、近くにはりつけ台がつけられて、その工事に失敗したら五庄屋の人たちが、殺されるという大変なことがおきました。しかし、そんな中でも五庄屋の人たちはあきらめず最後までがんばりました。その結果、工事は約六十日で無事終了しました。この工事に参加した人はのべ四万人にもものぼったそうです。私が通っている脇山小学校はとても人数が少ないから四万人という数にびっくりしました。六十日という少ない日数で完成したのは、四万人という人々が朝から晩までがんばって働いたからだと思います。

一九五三年六月二十六日。集中豪雨でこの水路などがこわれました。それまで三百年の間、集中豪雨などにもたえてきたのが判明しました。こわれなかったのは、水路をつくった人たちの気持ちが強かったからだと思います。

五庄屋の人たちは、命までもかけて水路工事をしたのがすごいと思いました。もし私が水路工事にかかわっていたらはりつけ台を見て、にげだしたり、なぜそこまでするのかという疑問を五庄屋にぶつけて、工事には反対していたと思います。

「人のために何かをやる」ということは勇気が必要で、とても大変なことだけどそれをやりとげた五庄屋の人たちに、いっぱい拍手をおくりたいなと思いました。私も人のために何かできる人間になりたいです。